

国語(古典)

▲文(日本文・中国文・史)・人間開発学部▼

【古典(古文・漢文)】

1

出典

紫式部『源氏物語』〈葵〉

解答

問一 ア

問二 エ

問三 (b)ーウ (i)ー才

問四 エ

問五 (d)ーイ (e)ー才

問六 ア

問七 ウ

問八 ア

問九 イ

問十 オ

問十一 (一)ーキ (二)ーウ

問十二 (X)1ーウ 2ーオ 3ーエ (Y)1ーア 2ーカ 3ーア

解説

問一 (1)は尊敬語であるので主語を敬う。波線部前の心内文が「顔がやつれてしまった。精進で日を過ごしたためだろう

か」と男君のやつれ具合を心配しているので、院が主語である。

(2)は謙譲語であるので目的語を敬う。波線部の直前に「中宮の御方に」と目的語が明示されている。

(3)は謙譲語である。波線部前の会話文の前に「命婦の君して」とあり、(注)も考慮に入れると、中宮が男君に挨拶していることがわかる。

(4)は補助動詞の丁寧語であるので、聞き手を敬う。波線を含む会話文は、中宮の挨拶に対する男君の返答であるので、聞き手は中宮である。

(5)は尊敬語であるので主語を敬う。春宮のもとを辞去して二条院に向かう人物が主語である。リード文を考慮に入れると、男君が主語であることがわかる。

問二 傍線部の主語は直前に明示されている。波線部(1)から接続助詞「て」で文がつながっているので、主語は変わらず

院である。「御前にて物など…思しあつかひきこえさせたまへるさま」の部分がわかりにくいですが、精進で顔がやつれてしまった源氏を心配する院の動作として適切なものを選ぶ。

問三 (b) 傍線部の「たまへ」は下二段活用の「たまふ」である。下二段活用の「たまふ」は、主に会話文・手紙文で用

いられ、謙譲語に分類され、主語は一人称である。エ・オは尊敬語の訳になっているので不適。「おほかた」は、名詞として「普通・概略」の意、副詞として「一般に、大体、(打消を伴って)全く」の意である。傍線部には打消表

現はないので、イは不適。ア、「ある程度疑って」は対応する表現がない。

(i) 「聞こえ」は謙譲語で、〴〵申し上げる〴〵の意、「まほしけれ」は願望の助動詞、「ど」は逆接確定の接続助詞である。以上を踏まえた才が正解である。

問四

「さらぬをり」の直訳は、〴〵そうではない時〴〵である。傍線部の副助詞「だに」は類推、〴〵でさえ〴〵の意である。「ある御気色」は直訳しにくい、その前後を含めた訳が、〴〵そうではない時でさえ『ある御気色』が加わって、とても辛そうダ〴〵という意味なので、「ある御気色」は辛そうな様子のことでであると推察できる。類推とは、程度の軽い例を挙げて、程度の重いものを想像させる働きである。以上の関係を考慮に入れると、〴〵そうではない時でさえ辛そうなのだから、ましてやそうである時はなおさら辛そうダ〴〵という関係が読み取れる。よって「そう」の指示内容は「辛い出来事」を指している。リード文から妻の死であることがわかる。

問五

(d) 「なまめかしさ」は、形容詞「なまめかし」が名詞化したものである。「なまめかし」は、〴〵優美だ、若々しい〴〵の意である。「まさる」は、〴〵増える、ひいである、上である〴〵の意である。以上より、イが正解。

(e) 本動詞「奉る」は、尊敬語として、〴〵召し上がる、お召しになる、お乗りになる〴〵の意と、謙譲語として、〴〵差し上げる〴〵の意がある。傍線部は、後文と接続助詞「て」でつながっているので、主語は一致する。後文は、〴〵西の対にいらっしやっただ〴〵であるので、主語は男君である。本文の地の文では男君が敬われており、「奉る」の目的語が「御装束」であることから「奉る」は、〴〵お召しになる〴〵の意の尊敬語であると判断できる。

問六

傍線部の「心にくし」は、〴〵心ひかれる、奥ゆかしい〴〵の意の形容詞。「心もとなき」は、〴〵はつきりしない、不安だ、待ち遠しい〴〵の意があるが、「心もとなきところなう」が「心にくし」と連用形で並列されているので、〴〵不安だ〴〵の意である。傍線部の直前「少納言がもてなし」に対する男君の評価である。評価の理由は、傍線部を含む文の「更衣の御しつらひ…姿めやすくととのへて」である。

問七

傍線部は、〴〵不満なところがない〴〵の意であるが、それは傍線部の直前の「うち側みて恥ぢらひたまへる御さま」に

ついで述べている。さらにその前の部分で「小さき御几帳ひき上げて見たてまつりたまへば」の部分で踏まえると、男君が御几帳をあげると、姫君が横を向き恥じらっている様子であることがわかる。

問八

傍線部の前の心内文を確認すると、〃灯りに照らされた姿や髪の様子が、ただあの心からお慕い申し上げる人（＝藤壺の宮）と違う所がなくなっていくなあ〃という内容である。『源氏物語』のあらすじを知っていると解きやすい。

問九

傍線部を含む一文は、今は絶えることなくお会いするはずなので、嫌だとお思いになるでしょうか。の意である。男君が頻繁に会いに来ることにかえって、姫君が嫌がるのではないかという発言である。会話文中の敬語に注目して主語を補う。

問十

傍線部直前の男君の発言を聞いた際の少納言の気持ちに傍線部である。「あやふく」思う理由は、傍線部後に説明されている。男君は、忍んで通いなさる高貴な方々と多く関係をお持ちでいらつしやるので、また気を遣わねばならない方が代わりに出てきなさるのではないかと、姫君の乳母である少納言は、亡くなった正妻のような存在が再び現れるのではないかと懸念しているのである。

問十一

(一) 「あざやかに」は形容動詞「あざやかなり」の連用形である。直前に「曇りなく」という連用形があることがヒントになっている。

(二) 連用形に接続している「にき・にけり・にたり・にけむ」の形の「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形である。ここでは係助詞「こそ」の係り結びで「にけれ」の形になっている。

問十二

(X) 「経る」は、「ず・ない」をつけて八行下二段活用と判断する。一文字動詞「得」・「寝」・「経」は下二段動詞としてまとめて覚えておいた方がよい。

(Y) 「参る」と「来」の複合動詞であるので、カ行変格活用である。直後の助動詞「む」の接続は未然形である。

解答

問一 (X)―イ (Y)―エ (Z)―ウ

問二 イ

問三 ア

問四 ウ

問五 イ

問六 エ

問七 ウ

解説

問一 (X) 「即」は「すなはち」と読み、^レすぐに^レを意味する副詞である。(Y) 「更」は「こもごも」と読み、^レ互いに^レを意味する副詞である。

(Z) 「且」は「かつ」や「しばらく」と読む副詞である。

問二 「劇」は^レ芝居、激しい^レを意味する。ア・ウ・エは^レ芝居^レの意、イは^レ激しい^レの意である。

問三 傍線部(a)を書き下すと、「実は三横^た唯だ其の一を余^{のこ}さんことを冀^{こひねが}へばなり」となる。本文一・二行目から、「三横」とは、横暴な周処、蛟、虎のことであるとわかる。したがって、「三横^た唯だ其の一を余^{のこ}さんこと」とは、^レ周処・虎・蛟のうち、ただ一つを残すようなこと^とと直訳できる。正解はア。イならば「余」が否定されていなければならないが、「余」の前に否定語はない。ウ・エは周処自身が三横の一つであることに矛盾する。傍線部(a)の前からの文脈を見ると、ある人が周処を説得して、虎を殺し、蛟を斬らせようとしたが、その真意は、実は三横のうちただ一つを残すようなことを願っていたからであった、となる。周処への依頼が文字通りの意味ならば、周処ただ一人を残して虎

と蛟がいなくなることを望んだことになるが、二重傍線部(1)にあるように、三横のうちもつとも横暴なのは周処であるから、むしろ周処が殺されて、虎か蛟が残ることを望んでいたと考えられる。

問四 「知」の目的語は「為^{リシヲ}人情^ノ所^ト患^{フル}」である。「為^ル名詞^ノ所^ト動詞^ノ」の形は、「名詞に動詞される」の意の重要な受身の句形である。よって、人々に嫌われる^ゝの意であるが、その理由は本文冒頭にもある通り、周処が凶暴であつたためである。

問五 どの選択肢も「況」を「いはンヤ」と読んでいることから、抑揚の表現であることがわかる。「いはンヤ」は文末を「ヲヤ」で結ぶことからイを選ぶ。

問六 傍線部の前半は、人^ゞは志が立たないことを思い悩む^ゞの意である。後半は「何^ッ」という疑問詞があり、文末が「憂へんや」という「未然形＋んや」で結んでいるので反語文である。よって、名声が表れないことを思い悩むだろうか、いや思い悩まない^ゞの意である。年齢を理由に行ないを改めても無駄だろうと話す周処に対して、清河は、立志の重要性を説いているのである。

問七 ア、「虎や蛟を退治することに成功して義興の人々から大変喜ばれた」が不適。義興の人々が喜んだのは、周処が死んだと思ったからである。イ、「周処は人々が嫌う三横を殺して」が不適。そもそも「三横」に周処は含まれていない。ウは、前半が傍線部(b)を含む文に、後半が本文の末尾に対応している。エは「もはや年を取り過ぎているといわれてしまった」が不適。「年を取り過ぎている」と言ったのは周処自身である。